

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23011

研究課題名（和文）マーク・ロスコの構図とミニマル・アートとの関係性

研究課題名（英文）The relationship between Mark Rothko's composition and Minimal Art

研究代表者

芦田 彩葵（Ashida, Aki）

神戸大学・人文学研究科・人文学研究科研究員

研究者番号：10844996

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1950年代に隆盛した抽象表現主義の画家マーク・ロスコの作品について、これまで十分に検証されてこなかった構図を焦点に作品分析を行い、ロスコ作品の独自性について検証した。その上で、60年代以降の後続美術、なかでもミニマル・アートにどのような影響を与えたのか、1961年のニューヨーク近代美術館での個展に対する展評や若手作家の言説を考察することで明らかにした。また抽象表現主義とミニマル・アートをつなげる画家としてアグネス・マーティンを取り上げ、ロスコとマーティンの様式を分析し、当時の批評を検証することで、両者の作品における関係性や60年代の美術をとりまく状況について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで十分に論じられてこなかったロスコの矩形による画面構成に着目することで、ロスコ作品が、絵画の形態や物質性を追究したミニマル・アートと同じ問題意識を有していたことが判明した。加えて、作品と空間の問題、時間を伴う鑑賞体験など他の共通点も浮かび上がってきた。本研究は、抽象表現主義の反動として出現したとされてきたミニマル・アートが抽象表現主義から多くを受容していたことを明らかにし、戦後美術史において抽象表現主義が果たした役割について新しい解釈を提示した点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research analyzed the works of Mark Rothko, a painter of Abstract Expressionism, which was prominent in the 1950s. The focus was on examining the aspects of composition that have not been thoroughly explored and assessing the uniqueness of Rothko's works. The study also delved into Rothko's influence on art after the 1960s, particularly Minimal Art, by examining exhibition reviews and the discourse of young artists to Rothko's solo exhibition at the Museum of Modern Art, New York in 1961. Additionally, the research explored the work of Agnes Martin, an artist who connected Abstract Expressionism and Minimal Art and examined the criticism of the time. The study revealed the commonalities between Rothko and Martins and the circumstances surrounding art in the 1960s.

研究分野：美術史

キーワード：アメリカ美術 戦後美術 抽象絵画 抽象表現主義 ミニマル・アート

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後にニューヨークを中心に隆盛したアメリカの抽象表現主義は、初めてヨーロッパに影響を与えたアメリカ固有の美術とされ、美術の中心地がパリからニューヨークへ移行する礎となった。マーク・ロスコは抽象表現主義の画家たちの中でも、クリフォード・スティール、バーネット・ニューマンと並び、色面抽象(カラーフィールド)の画家として論じられてきた。ロスコの先行研究においては、その多くが主に色彩と筆触による様式と「悲劇的テーマが決定的に重要である」というロスコの芸術観に立脚したテーマの分析に重きがおかれ、構図に着目した作品分析がこれまで十分になされてこなかった。

しかし、研究代表者がこれまでのロスコの様式変遷を注意深く検証すると、絵画の支持体であるカンヴァスの矩形のモチーフへの回帰が繰り返されており、常に画面の形態と色彩の一体化が念頭に置かれていたことが判明した。矩形をモチーフにし、水平性と垂直性の問題を意識的に取り扱ってきたロスコの画面構成は、抽象表現主義以降に登場し、絵画による形態の問題を追究したミニマル・アートの美術的動向を予兆するものだが、その点については、見過ごされてきた傾向にある。ロスコの矩形をモチーフにした画面構成に着目し、抽象表現主義の様式がそれ以降の美術的動向にどのように積極的あるいは批判的に継承されたかを考察することは、戦後のアメリカ絵画の展開について新たな可能性を提示することになるのではないかと考えるにいたった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで議論が不十分であったロスコの矩形をモチーフにした画面構成を焦点に作品分析を行うことに加え、関連の深かった抽象表現主義の画家たちの作品と比較検証を行うことで、改めてロスコ絵画の独自性を浮かび上がらせることである。そのことによって、従来の抽象表現主義の文脈から論じられることがなかったロスコ作品の再解釈を行う。そして、その様式が、抽象表現主義への反動として登場したとされてきたミニマル・アートの作品において、どのように継承され、展開されていったのかを解明することで、抽象表現主義とミニマル・アートの新たな受容関係を提示する。

3. 研究の方法

(1) ロスコに関しては、アメリカ美術文書館(ワシントン DC)、ニューヨーク近代美術館やグッゲンハイム美術館(ニューヨーク)のアーカイヴ等で一次資料の調査を行った。作品に関しては、ニューヨーク近代美術館のコレクション展示、ウィーン美術史美術館、ルイ・ヴィトン財団美術館(パリ)およびワシントンのナショナル・ギャラリー等で開催された個展、ロスコの子息でありロスコ作品を多く所有するクリストファー・ロスコ氏のニューヨークにある自宅を訪問して実見調査を行った。

(2) ロスコと関連の深かった抽象表現主義の画家たちに関しては、ニューヨークのバーネット・ニューマン財団およびアドルフ&エスター・ゴットリーブ財団、アメリカ美術文書館等で一次資料の調査を行い、作品に関しては、ニューヨーク近代美術館やメトロポリタン美術館(ニューヨーク)、ワシントンのナショナル・ギャラリー等で実見調査を行った。

(3) ミニマル・アートに関しては、アメリカ美術文書館およびニューヨーク近代美術館アーカイヴ等で一次資料の調査を行った。作品に関しては、ディア・ビーコンやニューヨーク近代美術館、ホイットニー美術館(ニューヨーク)等で実見調査を行った。

4. 研究成果

ロスコ作品の独自性を考察するため、ロスコと同じく色面抽象の画家と呼ばれるスティールとニューマンを取り上げ、ロスコ絵画との比較検証を行った。三者の絵画について、色面の表現によって観者の感情に直接訴えかけ、一つの体験をもたらすという点では共通項を見出すことができるが、ニューマンとスティールが強い色彩をしっかりとした筆触で塗り、隣接する領域の色を劇的に対比させたのに対して、ロスコの色彩と筆触は、柔らかな色彩を薄く重ね筆触を残したもので、地と図の境界も曖昧である。しかし、色がただ拡散して観者を包み込むだけではなく、地と図の微妙な明度差と光沢の加減、水平性と垂直性による構築的構図、さらにカンヴァス側面にまで施された着色によって、秩序ある構造的画面とスケールが備わっていることが分かった。その色彩と構図の関係によって、ニューマンとスティールの作品が強い色面と垂直性の構図によって観者を圧倒するかのような迫力で迫ってきたのに対して、ロスコの絵画は、観者の前に

立ちただかるのではなく、むしろ親密な「フィールド」を生み出していることが判明した。またニューマンは、ミニマル・アートをはじめポスト抽象表現主義の作家たちに影響を与えたが、ロスコとの往復書簡や彼の草稿類について分析することで、1960年代にミニマル・アート等の後続する美術が登場する過程で、抽象表現主義者達がどのように自らを言説化し歴史化していったのかが明らかとなった。

加えて、ロスコと抽象表現主義の特質を探るため、ロスコの抽象表現主義形成期に深い親交があり、共同で声明を発表したりインタビューに対応したりしたアドルフ・ゴットリーブの作品を考察した。ゴットリーブは1950年代に多様な絵画シリーズの制作を行ったが、それらの変遷を検証するなかで、彼が携わったいくつかのシナゴグでのコミッションワークが絵画様式の変化に関係していることが分かった。それらの作品を掘り下げていくと、戦後の宗教建築ラッシュ、画廊のプロモーション、美術館やギャラリーの建築や展示空間の変化、芸術家の社会への関わり方など、当時の様々な社会的要因が画家たちの作品大型化や作品スケール、特定の空間での展示志向に関わっていることが明らかになり、この時期から抽象表現主義の画家たちが自らの表現によって環境を構築しようとしていたことが分かった。

1960年代のアメリカは、継承、反発を含め抽象表現主義を起点に、カラーフィールド絵画、ポップ・アート、オブ・アート、ミニマル・アートなど多様な美術が生まれた時代であるが、なかでもミニマル・アートは抽象表現主義の評価確立に貢献したグリーンバーグらモダニズム美術批評の批評家たちから批判され、主情的な抽象表現主義への反発として生まれたとされてきた。そこで、ロスコとポスト抽象表現主義の画家たちの関係を検証するため、ロスコが1961年にニューヨーク近代美術館（以下、MOMA）で開催した個展を取り上げた。具体的には、MOMAのアーカイブに残された展覧会記録や展示プランの確認、当時の美術批評および、ミニマル・アートを代表するドナルド・ジャッドをはじめ、ロバート・ライマンら若手作家たちの言説を検証し、ロスコが60年代のアートシーンに与えた影響について考察した。その結果、ロスコが出品作品の選定や展示プランに積極的に関わり、絵画と空間の関係性、作品におけるエッジの処理の見せ方、作品の支持体や壁面との関係性、鑑賞体験の重要性など彼の世界観が全面に出された本展は、批評する側、制作する側の双方に大きな問題提起を行い、その後の60年代の美術動向や作家たちの意識にも作用を及ぼしたことが明らかになった。なかでも作品がもつ「スケール」の感覚と、絵画の支持体と壁面をも含む展示空間との関係性は、若手作家たちに新たな方向性を提示したことが判明した。その一方で、ロスコは本展の開催による心労から、60年代に新たな様式の作品群を制作し様々な表現を模索しながらも、MOMAでの個展以降は積極的に作品を発表せず、また次世代との交流も避けたことから、画家の活動が美術界から見えづらい時期となり、60年代に制作した三つの壁画シリーズや晩年の「ダーク・ペインティング」シリーズは、同時代の人の目にほとんど触れることはなく、当時の美術界において十分な分析と評価を得る機会を逃してしまったことも指摘した。

ロスコの作品とミニマル・アートの様式における受容関係については、抽象表現主義とミニマル・アートをつなぐ画家としてアグネス・マーティンに着目し、彼女の1956-1967年のグリッド絵画とロスコ様式の絵画について構図および鑑賞体験からの比較検証を行った。その結果、マーティンとロスコの様式における共通性として、水平性と垂直性によって成立する矩形が構図において重要な役割を果たしていること、手業による直線ではない、震えるような輪郭の矩形が画面内で反復されることで生じる画面の拡張性、カンヴァスの枠のフォーマットと画面の矩形による形態の一体化で生まれる作品の全体性、薄塗と曖昧な輪郭の反復による表面の揺らぎによって観者に生じる知覚の変化、画面の地と図の関係によって生じる遠心性と求心性などが明らかになった。しかし、マーティンの評価が高まる1960年代のアートシーンやミニマル・アートに関する批評を分析すると、それらの言説の多くが、あくまでロスコとの関連があったのは、マーティンの50年代のグリッド絵画以前の作品であるとして、マーティンのグリッド絵画とロスコの関係、ひいてはポスト抽象表現主義の作家たちとロスコの関係を切り離そうしていたことが認められた。その背景として、ロスコの構図がもつ特性が十分に理解されておらず、また当時の美術動向の文脈では、マーティンの表現における抑制された色彩、幾何学性、対称性などが重視され、マーティン作品を抽象表現主義以後の新たな潮流に位置づけようとしていたことが読みとれる。しかし、ミニマル・アートの先駆者と言われるフランク・ステラが1958年に制作を開始した、画面内をカンヴァスの外形に沿ってシンメトリカルな黒いストライプが反復するブラック・ペインティングは、観る者の視線を矩形の画面、つまり支持体であるカンヴァスの形態そのものへと向けさせた。本作品群についてステラは、「全体的な印象は、きちっと見ればその感覚においてロスコなんかととても似ている」と述べている。これはロスコが、画面内に矩形を連ねる構図によって、絵画特有の枠に囲まれた矩形の形態性を際立たせながら、絵画の表面性とオブジェクト性を追究したことを物語っている。一方で、ロスコが求めた造形性と触知性が受け継がれたマーティンの絵画によって、抽象表現主義にもミニマル・アートにも回収されない60年代の絵画作品の多様さと複雑な状況も浮き彫りにされた。加えて、当時の実際の状況を知るため、ミニマル・アートの代表的画家である桑山忠明氏にニューヨークで面会し、抽象表現主義の

集大成といわれる 1959 年の「16 人のアメリカ人」展に関する当時の受け止め方や、ミニマル・アートが隆盛する 1960 年代のアメリカのアートシーンについてインタビューを行い、ミニマル・アートの画家たちが抽象表現主義の画家たちに向けていた眼差しを考察した。

本研究は、ロスコの矩形をモチーフにした画面構成に着目し、新たな文脈からロスコ絵画と後続美術、なかでもミニマル・アートとの受容関係について考察を行ったものである。本研究で得られた成果をもとに、今後は画面構成に加えて、作品がもつ「スケール」の感覚と、絵画の支持体と壁面をも含む展示空間についても視野を広げ、ロスコ絵画と後続絵画の関係性について検討していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 芦田彩葵	4. 巻 24
2. 論文標題 アドルフ・ゴットリーブの1950年代における絵画の変遷について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『美術史論集』神戸大学美術史研究会	6. 最初と最後の頁 23-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芦田彩葵	4. 巻 23
2. 論文標題 「批評と作者 - バーネット・ニューマンとロバート・マザウェルの往復書簡から - 」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『美術評論家連盟 会報』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 芦田彩葵	4. 巻 22
2. 論文標題 「アグネス・マーティンのグリッド絵画におけるロスコ受容」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『美術史論集』神戸大学美術史研究会	6. 最初と最後の頁 13-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芦田彩葵	4. 巻 21
2. 論文標題 マーク・ロスコの1960年代のアートシーンにおける位置 1961年のニューヨーク近代美術館での個展を通じて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『美術史論集』神戸大学美術史研究会	6. 最初と最後の頁 29-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 芦田彩葵
2. 発表標題 アグネス・マーティンのグリッド絵画におけるロスコ受容
3. 学会等名 美術史学会西支部例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 芦田彩葵（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 公益財団法人西枝財団	5. 総ページ数 64
3. 書名 『林 智子 虹の再織』展覧会カタログ	

1. 著者名 林寿美、やなぎみわ、安藤礼二、芦田彩葵ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 TRANS-KOBE実行委員会事務局	5. 総ページ数 96
3. 書名 『Art Project Kobe 2019: TRANS- 』展覧会カタログ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------